

〈自由論文〉

# 日本赤十字社血液事業のキャッシュ・フロー分析

## The Analysis of Cash Flow Statement on Blood Program in Japanese Red Cross Society

井出 健二郎  
Kenjiro Ide

### 【Abstract】

The main research is to analyze with Cash Flow Statement on Blood Program in Japanese Red Cross Society (JRCS). The Accounting Standards on Blood Program in JRCS have revised in the accounting year of 2013. It is almost equal to Business Accounting Standards.

Therefore, the financial statements clearly show Blood Program activities. They are compared to the financial statements have done.

How about is the condition of cash flow on Blood Program in JRCS? In the process of taking cash flow analysis and developing the discussions, we'll clearly understand profitability and safety on Blood Program in JRCS.

### 【Keywords】

Cash Flow Statement, Blood Program, Japanese Red Cross Society (JRCS),  
Cash Flow Analysis, Profitability, Safety

## 1. 背景 (Backgrounds), 目的 (Goals) および目標 (Objectives)

本稿は、日本赤十字社の血液事業経営・運営がどのような状況になっているかを把握することがゴールである。それを達成するべく、すでに「日本赤十字社血液事業の財務分析」(『和光経済』第48巻第1号, pp. 9-22)を執筆したところである。「日本赤十字社血液事業の財務分析」<sup>1)</sup>では、日本赤十字社血液事業特別会計として平成25年3月期から報告している「血液事業特別会計歳入歳出決算書」をもとにした損益計算書と貸借対照表の数値(金額)等を基本的に検討し、それを活用し経営分析している。結果として、日本赤十字

社血液事業の収益性や安全性を議論している。

ただし、「日本赤十字社血液事業の財務分析」では、財務諸表の柱の一つ、キャッシュ・フロー計算書からの考察がなされていない。それに鑑みて、本稿では、日本赤十字社の血液事業をキャッシュ・フロー計算書をもとに検討することとした。

すなわち、「日本赤十字社血液事業の財務分析」を補完するものと考えている。

また、2015年10月4日から6日まで大阪国際会議場で開催された第39回日本血液事業学会のシンポジウムの一つでは日本赤十字社血液事業の財政状況の厳しさが報告される中、とりわけキャッシュ・フローの状況を危惧する指摘もあった<sup>2)</sup>。

さて、本稿にかかわる先行研究は、「日本赤十

字社血液事業の財務分析」で示したとおりである<sup>3)</sup>。そこで、本稿は以下の2点の目標を達成するように配慮した。

1つは分析データでも明らかにするように、日本赤十字社血液事業特別会計として平成25年3月期から報告している「血液事業特別会計歳入歳出決算書」をもとにしたキャッシュ・フロー計算書の数値(金額)等を基本的に検討する<sup>4)</sup>。この検討により、平成25年3月期から平成27年3月期までの3か年にわたる血液事業のキャッシュ・フローの状況が把握できるからである。

もう1つは、「血液事業特別会計歳入歳出決算書」の3か年にわたるキャッシュ・フロー計算書を利活用し、経営分析する。キャッシュ・フロー計算書本体に記されている数値(金額)等のみならず、事業経営の実態が把握できると考えたからである。

上記2点の目標を達成していくことにより、日本赤十字社血液事業の収益性や安全性をさらに検討できると想定している。

## 2. 分析データ (Collecting data) と調査方法

研究にあたっての分析資料については、日本赤十字社が血液事業における会計制度を全面的に改正した平成24年4月以降の「日本赤十字社血液事業特別会計規則」にもとづく以下のような財務諸表をもとに分析している。基本的に、本稿ではキャッシュ・フロー計算書を検討し分析するものの、有機的に損益計算書、貸借対照表にかかわる数値等を利活用している。

1. 平成24年度血液事業特別会計歳入歳出決算書(実数)一損益計算書、貸借対照表、キャッシュ・フロー計算書、剰余金処分(損失金処理)計算書<sup>5)</sup>
2. 平成25年度血液事業特別会計歳入歳出決算書(実数)一損益計算書、貸借対照表、キャッシュ・フロー計算書、剰余金処分(損失金処理)計算書<sup>6)</sup>
3. 平成26年度血液事業特別会計歳入歳出決算

書(実数)一損益計算書、貸借対照表、キャッシュ・フロー計算書、剰余金処分(損失金処理)計算書<sup>7)</sup>

また、日本赤十字社血液事業本部が年次の総会等に利活用している、以下の「事業報告及び歳入歳出決算の概要」も検討資料としている。

4. 平成24年度事業報告及び歳入歳出決算の概要<sup>8)</sup>
5. 平成25年度事業報告及び歳入歳出決算の概要<sup>9)</sup>
6. 平成26年度事業報告及び歳入歳出決算の概要<sup>10)</sup>

研究方法は、次のふたつの方法により構成される。ひとつ目の方法は、分析データの1~3に示されている「血液事業特別会計歳入歳出決算書」をもとにしたキャッシュ・フロー計算書の数値(金額)等を精緻に比較検討することによる。

ふたつ目の方法は、3か年にわたるキャッシュ・フロー計算書を、さまざまな分析指標をもとにして経営分析することによる。キャッシュ・フロー計算書本体に記載されている数値(金額)等の重要性は大きいですが、単一の表示項目のみを考察するには限界がある。すなわち、表示項目と別の表示項目とを組み合わせることから得られる比率・割合を分析することで、より客観的に事業の運営の実態に迫れると考えたからである。さらに、結果が収益性からの視点、安全性からの視点という2つの分析視点を提示できうるものである。

## 3. 結果と考察 (Results and Observations)

### 3.1. 平成25年3月期から平成27年3月期における血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書(財務数値)による実数分析による結果と考察

平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書(財務数値)による実数分析は、図表1の通りである。

キャッシュ・フロー計算書の意義は言うまでもなく、組織・事業の現金及び現金同等物(いわゆる

図表 1 日本赤十字社血液事業特別会計 平成 25 年 3 月期から平成 27 年 3 月期における歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書（財務数値）

		(円)		
区 分		H25 年 3 月期	H26 年 3 月期	H27 年 3 月期
1	事業活動によるキャッシュ・フロー			
	税引前当期純利益	△ 7,768,694,085	△ 9,111,374,272	△ 15,506,326,695
	減価償却費	10,030,414,304	8,707,303,426	9,739,726,929
	退職給付引当金の増減額	4,273,352,478	2,738,302,676	8,180,987,436
	徴収不能引当金の増減額	12,046,943	△ 827,318	△ 20,817,656
	賞与引当金の増減額	166,456,579	121,474,000	△ 260,845,748
	受取利息	△ 27,420,055	△ 48,960,617	△ 45,312,324
	支払利息	87,657,862	74,744,805	61,434,992
	固定資産売却益	△ 1,550,679	△ 1,748,905	△ 7,740,918
	固定資産売却損	62,000		55,488,268
	固定資産除却損	752,185,389	942,609,348	772,191,174
	減損損失		336,160,926	232,418,380
	長期前受補助金等取崩益	△ 1,748,963,144	△ 1,376,642,890	
	その他の特別利益	1,633,576,103		
	事業未収金の増減額	△ 1,703,448,678	△ 586,686,119	
	輸血用血液製剤の増減額	△ 1,047,437,732	581,831,450	
	分画製剤の増減額	△ 126,312,556	316,903	
	臍帯血の増減額	15,804,687	△ 287,580,377	
	原料血漿の増減額	1,239,491,778	△ 332,257,770	
	退職拠出金の増減額	1,634,046,600	2,417,005,141	
	その他資産の増減額	756,292,607	△ 3,399,054,778	
	買掛金の増減額	△ 2,183,706,248	1,169,211,667	
	その他負債の増減額	906,493,689	1,589,843,317	
	小計	6,900,347,842	3,533,720,613	
	利息の受取額	42,670,958	104,830,819	100,231,639
	利息の支払額	△ 72,898,802	△ 85,351,580	△ 62,455,462
	法人税等の支払額	△ 2,671,218	△ 2,610,073	△ 3,258,593
	事業活動によるキャッシュ・フロー	6,876,448,780	3,550,589,779	3,600,329,130
2	投資活動によるキャッシュ・フロー			
	定期預金の預入による支出	△ 5,000,000,000		
	定期預金の払戻による収入		1,710,000,000	1,250,000,000
	有形固定資産の取得による支出	△ 23,409,794,562	△ 8,875,224,129	△ 9,427,802,711
	有形固定資産の売却による収入	1,646,146	2,222,580	235,563,300
	無形固定資産の取得による支出	△ 3,113,644,442	△ 1,886,087,538	△ 1,762,109,471
	固定資産の除却による支出		△ 143,304,105	△ 147,622,513
	施設整備補助金等の受入れによる収入	323,964,135	122,065,408	606,991,081
	投資有価証券の取得による支出	△ 7,884,000,000		
	投資有価証券の償還等による収入	685,000,000	100,000,000	50,000,000
	基金拠出による支出	△ 10,000,000,000		
	その他	△ 263,032,612	28,076,403	△ 198,803,607
	投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 48,659,861,335	△ 8,942,251,411	△ 9,393,783,921
3	財務活動によるキャッシュ・フロー			
	長期借入金の返済による支出	△ 553,840,000	△ 801,434,000	
	リース債務の返済による支出		△ 106,524,605	
	財務活動によるキャッシュ・フロー	△ 553,840,000	△ 907,958,605	
4	現金及び現金同等物の増減額	△ 42,337,352,555	△ 6,299,620,237	△ 6,343,596,108
5	現金及び現金同等物期首残高	89,779,639,450	47,810,124,125	41,510,503,888
6	関連事業化に伴う現金及び現金同等物の増加額	367,737,230		
7	現金及び現金同等物期末残高	48,810,124,125	41,510,503,888	35,166,907,780

(出所) 平成 25 年 3 月期から平成 27 年 3 月期の 3 か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書（財務数値）より筆者作成。

るキャッシュ)の出入りを把握し、キャッシュの増減を把握するものである。また、キャッシュの出入りについては、事業活動、投資活動、財務活動という企業はもちろん組織・事業が常に行う3つの活動からのキャッシュ・フローを表現しているところに大きな特長がある。

まず、キャッシュ・フロー計算書から導き出された税引前当期純損益は、図表2のように平成25年3月期(以下、H25/3.と省略する)△7,768,694,085円、平成26年3月期(以下、H26/3.と省略する)△9,111,374,272円、平成27年3月期(以下、H27/3.と省略する)△15,506,326,695円と推移している。損失の幅が経年的に拡大している。また、血液事業のキャッシュ・フロー計算書は、間接法で作成されており、減価償却費を加算する。したがって、減価償却費は、H25/3. 10,030,414,304円、H26/3. 8,707,303,426円、H27/3. 9,739,726,929円と推移している。平成25年3月期においては、税引前純損益を上回るほどの減価償却費を計上している。

図表2 税引前当期純利益、減価償却費(再掲)

	(円)		
	H25年3月期	H26年3月期	H27年3月期
税引前当期純利益	△ 7,768,694,085	△ 9,111,374,272	△ 15,506,326,695
減価償却費	10,030,414,304	8,707,303,426	9,739,726,929

(出所)平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書(財務数値)より筆者作成。

次に、図表3のとおり、事業活動によるキャッシュ・フロー(残高)は、H25/3. 6,876,448,780円、H26/3. 3,550,589,779円、H27/3. 3,600,329,130円と推移している。平成25年3月期が最もキャッ

図表3 事業活動によるキャッシュ・フロー残高(再掲)

	(円)		
	H25年3月期	H26年3月期	H27年3月期
事業活動によるキャッシュ・フロー	6,876,448,780	3,550,589,779	3,600,329,130

(出所)平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書(財務数値)より筆者作成。

シュ・フロー残高が多く、平成26年3月期と平成27年3月期はほぼ同様な金額推移となっている。これは、血液事業が行った活動と経常活動の一部をキャッシュ・インフローとキャッシュ・アウトフローにもとづき差額・残高を表現した結果である。3か年全てにおいて正(プラス)の値であることは、いわゆる本業でキャッシュの入りがあること、キャッシュの出よりもその金額分上回っていることを示している。

ただし、事業活動によるキャッシュ・フロー残高について、その増減率を算定すると、図表4に示すとおり、平成25年3月期から平成26年3月期(以下、H25-H26.と省略する)が44.00%にも及ぶ減少率となっており、平成26年3月期から平成27年3月期(以下、H26-H27.と省略する)は6.50%の微増となっている。

図表4 事業活動によるキャッシュ・フローの増減率(前年度比)

	(%)	
	H25年-H26年	H26年-H27年
事業活動によるキャッシュ・フロー	△ 44.00	6.50

(出所)平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書(財務数値)より筆者作成。

図表5 投資活動によるキャッシュ・フロー残高(再掲)

	(円)		
	H25年3月期	H26年3月期	H27年3月期
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 48,659,861,335	△ 8,942,251,411	△ 9,393,783,921

(出所)平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書(財務数値)より筆者作成。

さて、投資活動におけるキャッシュ・フロー(残高)は、設備投資に代表される組織・事業体が投資にかかわってのキャッシュ・インフローとキャッシュ・アウトフローにもとづき差額・残高を表現した結果である。投資活動におけるキャッシュ・フロー(残高)は、図表5のとおり、H25/3. △48,659,861,335円、H26/3. △8,942,251,411円、H27/3. △9,393,783,921円と推移している。

投資活動におけるキャッシュ・フローは、正（プラス）の値であれば、投資活動によってキャッシュの入り（入金）がキャッシュの出（出金）よりもその金額分上回っていることを示している。一方、負（マイナス）の場合にはキャッシュの出（出金）がキャッシュの入（入金）よりもその金額分上回ったことをあらわしている。

一般的には負（マイナス）の値はその組織・事業体にとって好ましくない印象を与える。しかし、投資活動によるキャッシュ・フロー残高は一概にそう言い切れない側面がある。投資活動を表現するのに最も代表的な設備投資は、その設備におカネを投入すること、すなわちキャッシュの出を伴うことになる。キャッシュの出は積極的な設備投資の表れという一面も有している。

財務活動によるキャッシュ・フローは、図表6のとおり、H25/3. Δ 553,840,000 円、H26/3. Δ 907,958,605 円と推移するが、平成27年3月期の財務活動によるキャッシュ・フローは表示されていない。財務活動によるキャッシュ・フローは、基本的には借入れやその返済に生じるキャッシュ・インフローとキャッシュ・アウトフローにもとづき差額・残高を表現した結果である。企業会計における財務活動によるキャッシュ・フローについては借入れやその返済のほかに、社債の発行にかかわる収入、社債の償還にかかわる支出そして配当金の支払いなどにより構成されていることが多い<sup>11)</sup>。それに対して、血液事業の場合は「長期借入金の返済による支出」、「リース債務の返済による支出」のふたつの項目しか表記されていない。財務活動によるキャッシュ・フローは、図表6のとおりである。

図表6 財務活動によるキャッシュ・フロー残高（再掲）

(円)

	H25年3月期	H26年3月期	H27年3月期
財務活動による キャッシュ・フロー	Δ 553,840,000	Δ 907,958,605	—

(出所) 平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書（財務数値）より筆者作成。

最後に、現金及び現金同等物の増減額と現金及び現金同等物期末残高の推移について確認しておく。年度のキャッシュ・フローにかかわる現金及び現金同等物の増減額は、図表7のとおり、H25/3. Δ 42,337,352,555 円を最大幅として、H26/3. Δ 6,299,620,237 円、H27/3. Δ 6,343,596,108 円と3年連続してキャッシュの出がキャッシュの入りを上回る状態が続いている。結果として、現金及び現金同等物期末残高は、H25/3. 48,810,124,125 円、H26/3. 41,510,503,888 円、H27/3. 35,166,907,780 円とキャッシュが年々と減少している推移が顕著である。

現金及び現金同等物期末残高を増減率で確認すれば、図表8で示すように、H25-H26. は Δ 14.96%、H26-H27. は Δ 15.28% である。期末残高の減り幅までも拡大してきていることになる。

図表7 現金及び現金同等物の増減額、現金及び現金同等物期末残高（再掲）

(円)

	H25年3月期	H26年3月期	H27年3月期
現金及び現金同等物の増減額	Δ 42,337,352,555	Δ 6,299,620,237	Δ 6,343,596,108
現金及び現金同等物期末残高	48,810,124,125	41,510,503,888	35,166,907,780

(出所) 平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書（財務数値）より筆者作成。

図表8 現金及び現金同等物期末残高の増減率

(%)

	H25年-H26年	H26年-H27年
現金及び現金同等物期末残高	Δ 14.96	Δ 15.28

(出所) 平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書（財務数値）より筆者作成。

### 3.2. 平成25年3月期から平成27年3月期における血液事業特別会計・キャッシュ・フロー計算書にもとづく収益性分析・安全性分析による結果と考察

事業活動におけるキャッシュ・フロー（残高）は、平成25年3月期、平成26年3月期、平成27年3月期いずれも、結果として正（プラス）

の値であり、本業でキャッシュの入りがキャッシュの出よりもその金額分上回っている。また、投資活動におけるキャッシュ・フロー（残高）は、H25/3. Δ 48,659,861,335 円、H26/3. Δ 8,942,251,411 円、H27/3. Δ 9,393,783,921 円（再掲）と推移している。

この負（マイナス）の値については良否について一概に言えないことは指摘した。ここで問題なのは、フリー・キャッシュ・フローといわれる、事業活動におけるキャッシュ・フロー（残高）と投資活動におけるキャッシュ・フロー（残高）とを比較したときに生ずる差額である。その額により、投資活動の結果を問うものである。ここで、フリー・キャッシュ・フローは、図表9にかかげるように、H25/3. Δ 41,783,412,555 円、H26/3. Δ 5,091,661,632 円、H27/3. Δ 5,793,454,791 円となっている。

今回のように負（マイナス）の値となる場合、一般的には投資は好ましくないとされる。あるいは過度の投資ではないかと懸念される。

キャッシュ・フローは、その年度中にどのような活動からキャッシュが生み出されたかを検討し、その年度内においての各活動の是非等を確認できるところに特徴があるからである。事業活動によるキャッシュ・フローと投資活動によるキャッシュ・フローを検討するにあたり、その差額であるフリー・キャッシュ・フローは事業体の大きな評価判断材料となる。

図表9 事業活動によるキャッシュ・フロー、投資活動によるキャッシュ・フロー（再掲）、フリー・キャッシュ・フロー

(円)

	H25年3月期	H26年3月期	H27年3月期
事業活動によるキャッシュ・フロー	6,876,448,780	3,550,589,779	3,600,329,130
投資活動によるキャッシュ・フロー	Δ 48,659,861,335	Δ 8,942,251,411	Δ 9,393,783,921
フリー・キャッシュ・フロー	Δ 41,783,412,555	Δ 5,091,661,632	Δ 5,793,454,791

(出所) フリー・キャッシュ・フローについては、平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・キャッシュ・フロー計算書（財務数値）より筆者作成。

また、フリー・キャッシュ・フローの正（プラス）の値をもとに、財務活動によるキャッシュ・フローについても、その良否が決められるという別の一面も有している。

さて、経営分析指標にもとづいて、収益性と安全性を検討するにあたり、本稿では、事業収益事業キャッシュ・フロー比率（図表10参照）、総資産事業キャッシュ・フロー比率、事業キャッシュ・フロー対流動負債比率、事業キャッシュ・フロー対設備投資比率の4指標を考察した（図表11参照）。

まず、事業収益事業キャッシュ・フロー比率は、H25/3. 4.26%、H26/3. 2.18%、H27/3. 2.16%となっている。これは、血液事業の主たる活動収益の結果、どの程度のキャッシュ・フローが生み出され、確保されたかを示す指標であり、収益性を前提としたキャッシュ・フロー分析である。また、総資産事業キャッシュ・フロー比率は、血液事業

図表10 事業収益事業キャッシュ・フロー比率、総資産事業キャッシュ・フロー比率

(%)

	H25年3月期	H26年3月期	H27年3月期
事業収益事業 キャッシュ・ フロー比率	4.26	2.18	2.16
総資産事業 キャッシュ・ フロー比率	2.70	1.43	1.52

(出所) 平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・損益計算書・貸借対照表・キャッシュ・フロー計算書（財務数値）より筆者作成。

図表11 事業キャッシュ・フロー対流動負債比率、事業キャッシュ・フロー対設備投資比率

(%)

	H25年3月期	H26年3月期	H27年3月期
事業キャッシュ・ フロー対流動 負債比率	23.49	12.44	12.96
事業キャッシュ・ フロー対設備 投資比率	29.37	43.38	38.19

(出所) 平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・貸借対照表・キャッシュ・フロー計算書（財務数値）より筆者作成。

の有する資産が運用され、主たる活動を行った結果、キャッシュ・フローが生み出され、確保されたかを示す指標である。資産効率を表現する、これもまた収益性を前提としたキャッシュ・フロー分析のひとつである。総資産事業キャッシュ・フロー比率は、H25/3. 2.70%、H26/3. 1.43%、H27/3. 1.52%と推移している。

一方で、安全性の分析を前提にしたキャッシュ・フロー分析は、事業キャッシュ・フロー対流動負債比率と事業キャッシュ・フロー対設備投資比率をとりあげる。

はじめに、事業キャッシュ・フロー対流動負債比率は、支払うべき流動負債に対して、どの程度のキャッシュを年度で捻出できるかを示した分析指標であり、短期的な安全性を図るものである。結果として、H25/3. 23.49%、H26/3. 12.44%、H27/3. 12.96%となっており、平成25年3月期と平成26年3月期を比較すると、比率が大幅に低下しているものの、平成26年3月期と平成27年3月期の比較ではほぼ同率となって安定している。

また、事業キャッシュ・フロー対設備投資比率は、H25/3. 29.37%、H26/3. 43.38%、H27/3. 38.19%となっている。事業キャッシュ・フロー対設備投資比率は、投資活動によるキャッシュ・フローのうち設備投資、すなわち有形固定資産の支出によるキャッシュ・フローの支出と年度で生み出される事業活動によるキャッシュ・フローとを組み合わせた分析指標である。この指標により、設備投資の妥当性を検討し、長期の安全性が読み取れるものとなっている。平成25年3月期と平成26年3月期では、比率に大きな違いがある。また、平成26年3月期と平成27年3月期の比較においても大幅感はないものの、比率が安定的とは言えない状況にある。

#### 4. 議論と総括 (Discussions and Conclusions)

3か年に及ぶ日本赤十字社の血液事業特別会計のキャッシュ・フロー計算書にかかわる実数分析と、キャッシュ・フロー計算書を利活用した経営

分析を試みた。以下で総括と今後の議論について述べてみたい。その際に、「日本赤十字社血液事業の財務分析」(『和光経済』第48巻第1号, pp. 9-22)において、損益計算書、貸借対照表をベースに分析した収益性分析の結果と安全性分析の結果を比較検討したい。

収益性分析では以下のように結論づけていた。「まず、収益性分析については、非営利組織体である日本赤十字社に、その向上を追求させることに心ながら抵抗があるが、収益性は低調であると言わざるを得ない。」<sup>12)</sup>

キャッシュ・フロー計算書の実数分析からすれば、事業活動によりさまざまな要因からキャッシュ・インフローとキャッシュ・アウトフローが生じる。その結果としてのキャッシュ・フロー(残高)は、H25/3. 6,876,448,780円、H26/3. 3,550,589,779円、H27/3. 3,600,329,130円と推移し、いわゆる血液事業の本来活動ではキャッシュを生み出しているといえる。その点では収益性は確保されていると考えられる。

ただし、それは大前提の議論であり、平成25年3月期と平成26年3月期との金額かい離については簡単に説明がつくとは思えない減少額となっている。平成26年3月期と平成27年3月期は一見するところ平坦化してきているようにも見受けられるが、傾向はまだ確実とは言えない。

収益性分析では、事業収益事業キャッシュ・フロー比率と総資産事業キャッシュ・フロー比率とを考察した。事業収益事業キャッシュ・フロー比率は、平成25年3月期以降、3か年度において比率が低下している。企業でいえば、売り上げた成果に対して、どの程度キャッシュを手に入れたかという割合が低下していることと同じである。

また、総資産事業キャッシュ・フロー比率では、平成25年3月期以降連続して比率が低下していることはないものの、比率自体が低調である。血液事業の有する資産を使った結果のキャッシュの獲得であり、平成26年3月期では100万円の資産を使って1万4300円、平成27年3月期では100万円の資産を使って1万5200円しかキャッシュが得られないということである。

図表12 総資産回転率

	H25年3月期	H26年3月期	H27年3月期
総資産回転率	0.63回転	0.66回転	0.70回転

(出所) 平成25年3月期から平成27年3月期の3か年にわたる血液事業特別会計歳入歳出決算書・損益計算書・貸借対照表(財務数値)より筆者作成。

もちろん、図表12のように、総資産回転率の低調さも要因のひとつではあるものの、キャッシュ・フロー計算書を利活用した分析においても、収益性は低調といわざるを得ないようである。

また、安全性分析については次のような結語とした。

「3か年の推移からは、その安全性は危惧するほどではないとはいえ、低下傾向にあることは明らかである。」<sup>13)</sup>

まず、キャッシュ・フロー計算書の実数分析からは、投資活動によるキャッシュ・フロー(残高)の良否がある。その場合に重要なキーワードはフリー・キャッシュ・フローであった。フリー・キャッシュ・フローは、H25/3.  $\Delta$  41,783,412,555円、H26/3.  $\Delta$  5,091,661,632円、H27/3.  $\Delta$  5,793,454,791円であり、すべて負(マイナス)の値となっていた。フリー・キャッシュ・フローを検討する場合、ふたつの視点が導出される。ひとつは、血液事業の行うここ3か年度の投資活動は個々の年度のキャッシュ・フローにおいて資金的に余裕のないものとなっているのではなかろうかというものである。たしかに、これまで蓄積されてきたキャッシュ残高は潤沢である。よって、個別年度のキャッシュ・フローのみに固執せずとも投資活動は可能であるという側面はもちろん否定しない。ただし、キャッシュ・フロー計算書から導かれるフリー・キャッシュ・フローは正(プラス)の値をもって投資活動の安全性、金額的な妥当性を示すものであり、その点では血液事業のフリー・キャッシュ・フローは安全性が高いとはいえない。

また、フリー・キャッシュ・フローの値(金額)をもって、そのあとに表示される財務活動の良否を検討することが必要である。財務活動によるキャッシュ・フローは、H25/3.  $\Delta$  553,840,000

円、H26/3.  $\Delta$  907,958,605円と推移していることは、いずれの年度も借入金等の支出(返済)が、借り入れ等のキャッシュ・インフローを上回っていることを示している。これは安全性を追求する傾向としては好ましいものであり、評価できる。

ただし、フリー・キャッシュ・フローが大きく負(マイナス)の値を示していながらの財務活動によるキャッシュ・フローの動きは検討の余地はなかったかと推測する。

さて、安全性を判断する分析指標は、事業キャッシュ・フロー対流動負債比率と事業キャッシュ・フロー対設備投資比率とを選定した。

事業キャッシュ・フロー対流動負債比率は、年度で生み出された事業活動によるキャッシュ・フローと流動負債とを組み合わせ、短期的な安全性を判断するものである。各年度の比率は、H25/3. 23.49%、H26/3. 12.44%、H27/3. 12.96%となっており、平成25年3月期は20%を超える比率であったのに対して、平成26年3月期、平成27年3月期は12%台に低迷している。一般的にアメリカの企業においては40%以上をもって健全とされることを鑑みると安全性の程度は低いとみることもできる<sup>14)</sup>。

また、事業キャッシュ・フロー対設備投資比率は、年度で生み出された事業活動によるキャッシュ・フローと投資活動によるキャッシュ・フローのうち有形固定資産の支出とを組み合わせ、長期の安全性を判断する分析指標である。各年度の比率は、H25/3. 29.37%、H26/3. 43.38%、H27/3. 38.19%となっている。比率は資金的に余裕のある設備投資であるかどうかを判断するものであり、一般的に事業キャッシュ・フローの範囲内で設備投資がなされることをよしとする、すなわち比率では100%を上回ることになる。結果的には、各年度において50%にも満たない比率となっている。この限りにおいて長期の安全性には懸念があると考えられる。

日本赤十字社での血液事業の立ち位置は平成24年度の組織改革において大きく舵きりした。変革の中で財務面では過渡期。調整期の場合、実数値(金額)や比率がかんばしくないこともあり

うる。おそらく、現状はその真っただ中にあると察する。

損益計算書、貸借対照表をベースとした収益性分析、安全性分析に加え、キャッシュ・フロー計算書にもとづく分析の結果により、より一層、安全性にも配慮した財務戦略が必要であることが明らかとなった。

血液事業においては、キャッシュ・フローの動向により、運営を検討することも必要かと思われる。いわゆるキャッシュ・フロー戦略である。ここ数年における日本赤十字社血液事業の動向にこれからも注視したい。

#### 【注・参考文献】

- 1) 井出健二郎 (2015), 「日本赤十字社血液事業の財務分析」(『和光経済』第48巻第1号, pp.9-22)。
- 2) 第39回日本血液事業学会総会2015年10月5日, シンポジウム2「血液事業の将来展望」において、現状の日本赤十字社における財務状況の困難さについて幾度か指摘されていた。
- 3) 井出前掲稿, p.10
- 4) 日本赤十字社では、平成24年4月以降、血液事業において、「血液事業特別会計規則」を全面的に改正した。よって、平成25年3月期から直近の平成27年3月期をとりあげることにより、同一の会計基準のもとでの比較可能な分析が可

能であるからである。

- 5) 日本赤十字社 (2013), 平成24年度血液事業特別会計歳入歳出決算書(実数)一損益計算書, 貸借対照表, キャッシュ・フロー計算書, 剰余金処分(損失金処理)計算書
- 6) 日本赤十字社 (2014), 平成25年度血液事業特別会計歳入歳出決算書(実数)一損益計算書, 貸借対照表, キャッシュ・フロー計算書, 剰余金処分(損失金処理)計算書
- 7) 日本赤十字社 (2015), 平成26年度血液事業特別会計歳入歳出決算書(実数)一損益計算書, 貸借対照表, キャッシュ・フロー計算書, 剰余金処分(損失金処理)計算書
- 8) 日本赤十字社 (2013), 平成24年度事業報告及び歳入歳出決算の概要
- 9) 日本赤十字社 (2014), 平成25年度事業報告及び歳入歳出決算の概要
- 10) 日本赤十字社 (2015), 平成26年度事業報告及び歳入歳出決算の概要
- 11) たとえば、セブンアンドアイホールディングス平成27年2月期決算短信のキャッシュ・フロー計算書にはそうした記載がある。
- 12) 井出前掲稿, p.20.
- 13) 同上稿, p.21.
- 14) 渋谷武夫 (2008), 『ベーシック経営分析』中央経済社, pp.181-182.

なお、本稿は、2014年度-2016年度文部科学省科学研究費補助金、研究課題番号26380624(研究代表者 井出健二郎)の成果のひとつである。

(2015年10月18日 受稿)  
(2015年10月30日 受理)